

「擬四愁詩」としての、

魯迅の「我的失恋」詩

鈴木敏雄

魯迅に「我的失恋—擬古的新打油詩」と題する擬作詩が一篇ある（注1）。

一
我的所愛在山腰、
想去尋她山太高、
低頭無法淚沾袍。
愛人贈我百蝶巾、
回她什麼、貓頭鷹。
從此翻臉不理我、
不知何故兮使我心驚。

（其一）

我的所愛在鬧市、
想去尋她人擁擠、
仰頭無法淚沾耳。
愛人贈我雙燕圖、
回她什麼、冰糖壺蘆。
從此翻臉不理我、
不知何故兮使我糊塗。

（其二）

我的所愛在河濱、
想去尋她河水深、
歪頭無法淚沾襟。
愛人贈我金錶索、
回她什麼、發汗藥。
從此翻臉不理我、

我が愛する所は山腰に在り、
去きて她を尋ねんと想うも山太高し、
頭を低れて法無く涙は袍を沾す。
愛する人我に贈る百蝶の巾、
她に什麼をか回さん、猫頭鷹なり。
此れより臉を翻して我を理らず、
何の故かを知らず我が心をして驚かしむ。

我が愛する所は鬧やかなる市に在り、
去きて她を尋ねんと想うも人擁擠す、
頭を仰げて法無く涙は耳を沾す。
愛する人我に贈る双燕の図、
她に什麼をか回さん、冰糖壺蘆なり。
此れより臉を翻して我を理らず、
何の故かを知らず我をして糊塗たらしむ。

我が愛する所は河浜に在り、
去きて她を尋ねんと想うも河水深し、
頭を歪めて法無く涙は襟を沾す。
愛する人我に贈る金錶の索、
她に什麼をか回さん、発汗藥なり。
此れより臉を翻して我を理らず、

不知何故兮使我神經衰弱。

（其三）

我的所愛在豪家、
想去尋她兮没有汽車、
搖頭無法淚如麻。
愛人贈我玫瑰花、
回她什麼、赤煉蛇。
從此翻臉不理我、
不知何故兮—由她去罷。

（其四）

この詩は、バラの花を贈ってくれるような愛する相手に、愛の証にとヤマカガシ（蛇）のようなものを贈ったところ、嫌われてしまった、それならいっそ彼女の勝手にさせた方がいい、それが私の失恋（詩）であると戯画的に詠む、すなわち詩題に言う「打油詩」である。この詩の作詩意図や作詩背景に関しては、すでに数々の論考があり、多くのことが明らかにされている（注2）。

例えば文革期には、この一連の詩を通して男女間の気持ちの齟齬を詠むことで、魯迅は階級間、思想間の対立を浮き彫りにした等の解釈が行なわれている。

魯迅はなぜこの「私の失恋」を書いたのか。彼は「私と『語絲』の一部始終」で、「私の失恋」は、当時『ああ、死にたい』の類の失恋詩が流行しているのを見て、『勝手にしろ』でけりをつける一首をことさら作り、戯れたのである」とはっきり言っている。彼は『野草』英訳序でも、「当時流行した失恋詩を諷刺するために、『私の失恋』を作った」と言っている。…（中略、以下同様）…この「戯れた」詩は、実は厳密な構想を経ている。…：…相手が贈ってきたものは、絹のハンカチ、つがいの燕の絵、懐中時計の金の鎖、バラの花である（これらは、みな貴重なものであり、美しいものを意味する）。「私」の贈ったものは何かといえば、ミミズク、ピントンホーロー、アスピリン、ヤマカガシである。これらの物は一般の世間の目から見ると、みな低俗なものであり、恐ろしいものである。不吉の意を含んでいる。…：…許壽裳は「私の失恋」に話が及んだ時、「この詩は当時の『ああ、生きていられない、すべてを失った』というような類の失恋詩の流行を皮肉っているのである、…：…読者の多くは（魯迅の）口か

らのでまかせだと思いきみ、面白がっているだけで、ミミズクは彼がことのほか好んだものであり、ピントンホーローはよく食べていたし、アスピリンは常用しており、ヤマカガシも見るのが好きだったことを分かっている。やはり真面目な詩であり、何の勘ぐりもいらぬ」と言っている。この話は我々にとって参考になる。……多かれ少なかれ既に好みの違い、感情の不一致を感じている以上、まともな愛は成立しない。そのような「愛」は未練を残すに値しないし、そのような失恋などこだわらなければならない。それなら「勝手にしろ」である。魯迅のこの詩は、当時流行した失恋詩を辛辣に諷刺しただけでなく、若者を教育している。愛は共通の革命の志を基礎にして成立する。階級が違い、生活が違い、立場や観点が違い、思想感情が両者両様であるのに、どうして互いに情を生み出すことができよう。これはまた当時流行した地位や財力を条件とした、「一目惚れ」の資産階級の恋愛観に対する批判でもある。……

(倪墨炎『魯迅舊詩淺説』一九七七年上海人民出版社より抄訳)

ここでは、魯迅在世当時の階級社会の構造がそのまま反映された批判の詠となっている点が評価され、文学的にも高い価値を得たかの感がある。

ところでそれは、後に付与された解釈に基づく評価であって、魯迅はもともと、右の引用文中にも彼自身の言葉として引かれていたように、当時流行した「ああ、死にたい」の類の「失恋詩」に対する批評を行なうことを意図している。

例えば、当時の「失恋詩」には次のような作品がある(注3)。

鳥兒棲息在樹枝上、
鳥が木の枝に止まっている、

樹兒倒了、
木が倒れると、

他便去巢人家的棟梁。
鳥は人の家の梁に巣くう。

但是、親愛的姑娘、請告訴我、
でも、大好きなあなた、教えてほしい、

假使棟梁也折了、
もしも梁まで折れてしまったら、

又叫他飛到何方。
鳥にどこに飛んでいけというのか。

魚兒游泳在小河裏、
魚が小川で泳いでいる、

河水枯了、
川の水が涸れると、

他便飄到汪洋的海裏。
魚は広々とした湖まで漂っていく。

但是、親愛的姑娘、請告訴我、
でも、大好きなあなた、教えてほしい、

假使海水也乾了、
もしも湖の水まで干上がってしまったら、
又叫他向那裏找安身之地。
魚にどこに安住の地を探せというのか。

我年輕的時候、
子供の頃、

我的心緊緊地繫在母親身上。
僕の心は母さんの体にしっかりと抱かれていた。

母親死了、
母さんが亡くなると、

我閑空的心便到處流浪。
僕のうつろな心は到る処をさまよった。

後來碰了一個美麗的姑娘、
後で美しいあなたと出会い、

就把她纏住了。
あなたにすがった。

但是、親愛的姑娘、請告訴我、
でも、大好きなあなた、教えてほしい、

假使你不愛我、
もしもあなたが僕を愛してくれないのなら、

我的心更向何處去求歸宿。
僕の心はどこに行き場を見つけたらいいの。

無論、この詩が魯迅の批判の対象となったというものでは決してない。批判されるべき作として挙げたのではない。しかし当時の風潮下において、愛情を失うことを恐れるあまり、相手依存の精神状態が前面に出た詠となっている一篇があるとすれば、それは魯迅の好むところではなかったであろう。「母親」的精神世界喪失の代償として「親愛なる姑娘」に「身を安んずるの地」や「帰宿」を求めるような詩精神は、魯迅ならば少なくとも距離を置いて接してはいたはずである。

魯迅の「我的失恋」詩は、思いがうまく通じなければすぐに「ああ、死にたい」と洩らすような詩精神を遠ざけるべく目論まれた、文芸批評的な一篇で元来あった。それが後に、その作品構造から階級社会を諷刺している等の解釈が付与されるにまで至っている。

いま問題にしたいのは、本来の文芸批評的な主張にたち返った場合、当時流行した「ああ、死にたい」の類の「失恋詩」を諷刺するのに、魯迅がなぜ「擬古」の手法を用いたのか、それもなぜ他でもない「四愁詩」に擬したのかという点である。この「我的失恋」詩が階級社会の諷刺としても価値ある作品として定評を得るに至る要因の一つは、詩の構造上の特質に由来すると思われるが、それは「四愁詩」に擬したことと切り離せないように思うのである。

二

魯迅の「我的失恋」詩は「擬古」とあるように擬作詩であり、それは漢の張衡の「四愁詩」并序（注4）、

張衡不樂久處機密、陽嘉中、出爲河間相。時國王驕奢、不遵法度、又多豪右并兼。衡下車、治威嚴、能內察屬縣、姦滑行巧劫、皆密知名、下吏收捕、盡服擒、諸豪俠遊客、悉惶懼逃出境。郡中大治、爭訟息、獄無繫囚。時天下漸弊、鬱鬱不得志、爲四愁詩。屈原以美人爲君子、以珍寶爲仁義、以水深雪雰爲小人、思以道術相報、貽於時君、而懼讒邪不得以通。其辭曰、（張衡久しく機密に処るを樂しまず、陽嘉中、出でて河間の相と爲る。時に國王驕奢にして、法度に遵はず、又た豪右の并兼する多し。衡車を下りて、威嚴を治め、能く屬縣を内察し、姦滑の巧劫を行なふは、皆密かに名を知り、吏を下して收捕し、尽く服擒せしむれば、諸豪俠遊客、悉く惶懼して逃げて境を出づ。郡中大いに治まり、争訟息み、獄に繫囚無し。時に天下漸く弊にして、鬱々として志を得ず、四愁詩を爲る。屈原は美人を以つて君子と爲し、珍宝を以つて仁義と爲し、水の深く雪の雰たるを以つて小人と爲し、道術を以つて相報ゆるを思ふも、時君に貽るは、讒邪以つて通づるを得ざるを懼る。其の辞に曰はく、）

一思曰、
一思に曰はく、
我所思兮在太山 我が思ふ所は太山に在り
欲往從之梁父艱 往きて之れに従はんと欲するも梁父艱し
側身東望涕霑翰 身を側めて東のかた望めば涕は翰を霑ほす
美人贈我金錯刀 美人我に贈る金錯刀
何以報之英瓊瑤 何を以つてか之れに報いん英瓊瑤なり
路遠莫致倚逍遙 路遠くして致す莫く倚りて逍遙す
何爲懷憂心煩勞 何為れぞ憂ひを懷きて心は煩勞する

二思曰、
……（以下省略）

を原詩としている。張衡のこの一篇は、その序にも言うように、主君に対する臣下の道義心（忠）が小人の誹謗中傷のために上に通じない危懼感を（男女の

「擬四愁詩」としての、魯迅の「我的失恋」詩

恋愛關係に託して）詠む。

魯迅は、当時流行した「ああ、死にたい」の類の失恋詩の批評に、数多くある古典的恋愛詩・失恋詩の中から、他でもないこの「四愁詩」に擬する形を採択した。それは魯迅が戯画化したい失恋と何らかの似通った状況を描出できる要素が、中に多く含まれていたからであろう。あらためて最初から詩一篇を創出するよりも、原詩に含まれる既成の要素を用い、残りの部分を幾分か改変することにより、自分の主張を始めて描くことができる、もしくはより一層効果的に描くことができる。そのように魯迅は考えたものと思われる。では、それは具体的にどのようなものなのか。何よりも先ず「我的失恋」詩が「擬古」である点に鑑み、あらためて原詩との比較を試みることで、その擬作手法を探ってみたい。その説明が自ずと、他でもない「四愁詩」に擬した理由をも明らかにしてくれるはずである。

ところで、擬作手法および擬作意図を考えるに当たっては、実は原詩との比較だけでなく、その後の晋の張載や傅玄によって承け継がれた「擬四愁詩」の系譜があることを看過できない。魯迅は張衡の「四愁詩」があったから擬作したというよりも、いわば慣習化した「擬四愁詩」の流れがあったからこそ、自らその流れに沿って擬作を試みている。そのように考える方が、よりの確であろう。原詩の「四愁詩」自体も、むしろ模倣されてこそ著名になったと言っている。従来考えられてこられなかったのはその点で、魯迅の擬作意図を明らかにするには、模倣の流れを作った擬作詩すなわち「擬四愁詩」の系譜とのテキスト連関を併せ見る必要がある（注6）。

では、「擬四愁詩」の流れとはどのようなものか。「擬四愁詩」は『文選』に其四を所収する張載の、

我所思兮在營州 我が思ふ所は營州に在り
欲往從之路阻脩 往きて之れに従はんと欲するも路阻まれて脩し
登崖遠望涕泗流 崖に登りて遠く望めば涕泗流る
我之懷矣心傷憂 我の懷へる心は傷み憂ふ
佳人遺我綠綺琴 佳人我に遺る綠綺の琴
何以贈之雙南金 何を以つてか之れに贈らん雙南金なり
願因流波超重深 流波に因りて重深なるを超えんことを願ふも
終然莫致增永吟 終然に致す莫く永吟を増す

（其四）

と、『玉臺新詠』に序と併せて全四首を所収する傳玄の、

昔張平子作四愁詩、體小而俗、七言類也。聊擬而作之、名曰擬四愁詩。其詞曰、(昔張平子四愁詩を作るも、体小にして俗、七言の類なり。聊か擬して之れを作り、名づけて擬四愁詩と曰ふ。其の詞に曰はく、)

我所思兮在朔方

我が思ふ所は朔方に在り

願爲飛鴈俱南翔

願はくは飛鴈と爲りて俱に南のかた翔けん

煥乎人道著三光

煥乎たる人道は三光を著はすも

胡越殊心生異鄉

胡越は心を殊にして異郷に生く

愍余不遭罹百殃

愍れむ余の遭はずして百殃に罹るを

佳人貽我羽葆纓

佳人我に貽る羽葆の纓

何以要之影與形

何を以つてか之れを要めん影と形となり

增水憂結繁華零

増水憂ひは結ぼれて繁華零つれば

申以日月指明星

申ぬるに日月と明星を指すとを以つてす

星辰有翳日月移

星辰に翳り有りて日月は移り

驚馬哀鳴慙不馳

驚馬は哀鳴して馳せざるを慙づ

何爲多念徒自虧

何為れぞ念ひ多くして徒らに自らを虧くや

(其四)

とがあることが知られている。そしてこの二篇の存在は魯迅も周知していたはずである。

このうち、前者の張載の擬作は(全四首とも)張衡の原詩に一句増して形式を整えただけの、ほとんど忠実なパステイッシュであると言っている。他者の妨害があるために思いを寄せる人に贈り物(忠義心)が届かないことを絶望視するという内容は、原詩と何ら変らない。そこには原詩に対する共感と信奉の姿勢が窺える。支持模倣であると言って差し支えない。恐らくは八王の乱前後の世乱を目の辺りにし、張衡同様の感懐を覚えて出仕の意を断とうとした張載自身が詠出されている。

それに対し、後者の傳玄の擬作はいささか異なる。その序文にも言うように原詩を「體小而俗」と見做し、反対模倣(注6)の姿勢をとっている。一篇の句数を倍増して儒教的な哲理を詠み込み、君臣間の道義をいっそう強調する。やはりパステイッシュであるが、内容から見ると表面的には原詩から乖離するニュアンスが強い。とりわけ妨害者の介在原詩や張載のように強調せず、

かえって執拗に贈り物を届けようとするかに見える点は、逆に思いの通じない原因がむしろ君臣間自体にあるかの読みを暗示させている。鄭子瑜はその論文「周氏兄弟の新詩を論ず」(注7)で、

晋代的傳玄曾經擬作過、也是用『由她去罷』差不多的意思收場的。(晋の傳玄もやはり擬作し、「勝手にしろ」とさして違わない意味内容で締め括っている。)

と言っている。この論は魯迅の擬作意図を考えるに当たり、傾聴に値する。すなわち「擬四愁詩」には、その投げ掛けるテーゼの面で原詩から多方向に乖離できる性質が強く、魯迅もこの傳玄あたりからヒントを得、それを利用した可能性があると言っていることができることになる。傳玄の立場では、「三光」すなわち天の輝き(忠義を受け容れる心)そのものが早くも失せ、贈り物が届くか届かないかを問題にする以前に、「勝手にしろ」と言わざるを得ない状況に陥っている。「擬四愁詩」の系譜には、このような反対模倣の流れがあるのである。原詩の張衡の「四愁詩」は、その序にあるように、屈原の『楚辭』文学を承け継ぎ、確かに旧社会にあっては、君臣間の在り方の規範ともなるべき道義心の必要を説き得ている。張載、傳玄いづれも出発時点ではその原詩への共感があり、男女の恋愛関係に君臣関係を置き換え、贈り物の受け渡しの如何(および妨害者の介在の如何)によって両者の関係を詠出している。その点では、両者とも基本構造は原詩と変わっていない。しかし、贈答品のやり取りの状況を如何に詠むかで、擬作する者の観点が自在に反映できる。それがこの「擬四愁詩」の系譜の一特質的要素となっている。同じ晋代に在ってすでに忠実な支持模倣と反対模倣の二つの動きが見られるのは、この詩のそのような特質からもたらされている。魯迅はまさしくその後者の動きに着目し、「擬四愁詩」の反対模倣の系譜を自らの文学に意識的に内包させ、活用しようとしたのではないかと思われるのである。

張載、傳玄以後は、「擬四愁詩」の例をあまり見ない。その伝統は原詩と張・傳の二篇ではほぼ出来上がったと見てよいだろうが、ずっと後世になって(十六世紀はじめ)、例えば『古詩紀』の編纂で知られる明の馮惟訥の兄馮惟健に「擬四愁詩」并序(錢謙益『列朝詩集』所収)が一篇ある。

漢張衡寄意於君、作四愁詩、然實一愁止耳。北海馮惟健賦命蹇坎、守道自信。皇皇京國、于時父守石阡、母弟僑于青、妻子還閩陽、朝夕懷念、不

寧厥居。乃若所愁、眞四愁矣。故擬而賦焉。然衡託物之興遠、余述事之意多、期于道實、不論工拙、覽其作者、可以流涕矣。(漢の張衡意を君に寄せ、四愁詩を作る、然れども実は一愁にして止むのみ。北海の馮惟健賦命塞坎たるも、道を守りて自ら信ず。皇皇たる京国、時に于いて父は石阡を守り、母弟は青に孺し、妻子は閩陽に還り、朝夕念ひを懷きて、厥の居に寧んぜず。乃ち愁ふる所のごときは、眞に四愁なり。故に擬して焉れを賦す。然れども衡の物に託するの興は遠く、余の事を述ぶるの意は多し、実を道ふを期し、工拙を論ぜず、其の作を覽る者、以つて涕を流すべし。)

……(其一、其二は省略)

我所思兮在閩閩
欲往從之路崎嶇
凄凄霜露臨丘墟
鹿場町曠依吾廬
妻兮抱子愁獨居
昨聞邊關飛羽書
胡兒殺人如匹雛
將軍斂兵不敢驅
思之不見心躊蹰

(其二)

我が思ふ所は閩閩に在り
往きて之れに従はんと欲するも路崎嶇たり
凄々として霜露は丘墟に臨み
鹿場の町曠は吾が廬に依る(注8)
妻は子を抱きて独り居るを愁へ
昨ふ辺関に羽書を飛ばすを聞く
胡兒は人を殺すこと匹雛のごときも
將軍は兵を斂めて敢て駆けず
之れを思ふも見えず心は躊蹰す

我所思兮在燕京
欲往從之塵盈盈
青樓有女宛清揚
晨理機杼織未成
我欲贈之雲錦屏
羅綺結成雙鳳形
懷之中夜步前楹
長歌宛轉誰爲聽
思之不見心煩冥

(其四)

我が思ふ所は燕京に在り
往きて之れに従はんと欲するも塵盈々たり
青樓に女有り宛として清揚たり(目が美しい)
晨に機杼を理ふるも織りて未だ成らず
我は之れに贈らんと欲す雲錦の屏
羅綺結びて成さん双鳳の形
之れを懷きて中夜に前楹に歩むも
長歌宛轉として誰か聴くを為さん
之れを思ふも見えず心は煩冥す

この一篇は、或いは馮惟健固有の儒教的精神(忠孝)が醸す特質かもしれない

「擬四愁詩」としての、魯迅の「我的失恋」詩

いが、其四が張衡の「四愁詩」の流れを汲む伝統的なパステイッシュに作ってあるのに対し(ただし傳玄同様、妨害者の存在は強調されていない)、其一から其三までは男女の恋愛関係(君臣関係(忠))の伝統的な構造を父子、母子、兄弟、夫婦の関係(孝慈)に組み換え、もはや贈答品のやり取りを問題とせず、王朝を苦しめ家族を分断する妨害者(北虜南倭)があることへの遣る方ない絶望感を前面に出している。四者に対する切実なる「愁」を詠んでいるからこそ其の「四愁」であるとの発言裡には、原詩の形式および内部模倣を型通り四回繰り返すだけの従来の「擬四愁詩」への批判も込められている。馮惟健のこの擬作には「擬四愁詩」の系譜の近世的変革を見て取ることができ、同時に、「擬四愁詩」の原詩乖離の方向が多岐にわたることも、魯迅に先立って立証されている。

三

さて、以上のような絶望的な忠孝を詠む「擬四愁詩」の流れを熟知していたであろう魯迅は、愛する相手に物を贈っても気持ちがあまく通じず、「ああ、死にたい」としか詠めない当時の失恋詩を目の辺りにし、諷諭を思い立った。そしてその時、事の基本構造が「四愁詩」および「擬四愁詩」に極めて類似していることに想い到了と思われる。魯迅ならばこのような失恋をした場合、最終的には「勝手にしろ」と言う。そこで「四愁詩」を基調としつつもうひねりし、その反対模倣の方向をとる「擬四愁詩」の動きに沿うことで、「私の失恋」と題して戯れ歌を作った。その際、魯迅が自らも「擬四愁詩」を作ることによってはじめて表出できると考えたものは何かといえば、それは「擬四愁詩」の流れで見えてきたように、男女の関係に於ける贈り物の受け渡しを如何に(および妨害者の介在を如何に)描くかによってのみ表現できる、自らの恋愛観ではなかったか。その点について、「四愁詩」および従来の「擬四愁詩」との比較からもう少し具体的に見てみたい。

魯迅の「我的失恋」詩と原詩との主な共通要素は、男女の恋愛関係が詠まれている点、そしてそれらが贈答品をやり取りすることで互いの気持ちを確かめ合おうとする点の二つである。魯迅が描こうとするものは、どうしてもこの二つの要素の醸す構造が欠かせなかった。だからこそ、何よりもその要素を備える「四愁詩」およびその擬作をモデルにしたと思われる。

では相違点はどうかという点、主として三つある。文語か口語かの差やそのほか細部の差異はここでは措き、一つは、男女の間にさしたる妨害者がいない点。二つ目は、贈答品が相手に届いている点。三つ目は、男女がやり取りする

贈答品に価値観の齟齬がある点である。この三点のもたらす落差は、男女の関係を君臣関係を仮託して政治上の自らの立場を表明する比較的シリアスな原詩およびその擬作に対し、男女の関係を男女の関係のままで詠む点と相俟って、まずは内容上の茶化しを醸し、所謂パロディー化を導いている（注9）。「四愁詩」に擬した上での独自性やそこに託されたものは、言うまでもなくこれらの差異から生じている。

これらの差異のうち、一つ目は傳玄の「擬四愁詩」あたりの反対模倣の動きに沿うことに由来しているであろうことは既述した。二つ目もその延長線上に在ると見てよいと思うが、それは三つ目の贈答品の価値観の齟齬が何に基づくのかとも関係がある。

魯迅が、贈答品に価値観の齟齬を設定し、届いた贈答品に相手の女性がそれほど向くという設定をさらに加えたのは、愛する相手に気をもむことで不安感が増大し、やがて絶望感に変わることを描こうとしてであろう。では、そのような一種のひねりがどこから来ているのかといえば、心当たりとしては『詩經』衛風「木瓜」の、

投我以木瓜 我に投ずるに木瓜を以つてすれば
報之以瓊琚 之れに報ゆるに瓊琚を以つてす

匪報也 報ゆるに匪ざるなり

永以為好也 永く以つて好しむと為すなり

(第一章)

……(第二章、第三章は省略)

からの示唆が想起できる（注10）。この「木瓜」篇は『文選』所収の張衡「四愁詩」一思（其一）の李善注にも引かれているので、恐らくは魯迅も目にしては来たはずである。これに拠れば勿論、果実と宝石という贈答品間で価値の齟齬は来たしていない。しかしさらに魯迅が見ていたであろう朱熹の『詩集傳』に拠れば、「微物」を贈っても「重寶」が返ってくるのは贈答者間で「好（よしみ）」が通じているからであるとある。魯迅は恐らくはこの「微物」と「重寶」との落差を利用し、逆に「重寶」を贈ってきた相手に「微物」でこたえる形を設定して、近代が『詩經』の時代のように好しみの通じる時代ではなく、価値観の齟齬が絶望感を生んでいることをあらわに描いていく。ここに、「四愁詩」の時代のように恋路を邪魔する者がいる訳でもないのに依然として好しみを通

じさせられず「ああ、死にたい」と詠む、忠孝に絶望していた古典の昔と少しも変わらない当今の青年詩壇が浮き彫りにされ、それもさしずめ贈り物が気に入らない程度で絶望している当人同士に問題があるとする魯迅独自の恋愛観が、はじめて浮かび上がる。この点は「木瓜」篇にさらにひねりが加味され、「四愁詩」とその擬作の系譜に見られる古典時代の伝統や慣習との比擬を経て、その落差からもたらされる諷刺の効果を有効に働かせる表現手法を採ることで、はじめてできるものである。新時代の新しい文字を模索すべき青年詩壇に対して、価値観の齟齬を乗り越え絶望感を唾棄せよとの要請も、このような表現手段によって効果的になされるのではないか。「四愁詩」および「擬四愁詩」に擬した理由は、そこに在ると考える。

四

では、「擬四愁詩」である魯迅の「我的失恋」詩にもその根底には原詩への共感と信奉の思いが込められ、それに力を借りる形で自らの主張を詠出しているのだろうか。擬作詩は原詩へのシンパシーが働いて作成されるという見方からすれば、一般にはそれが言える。しかし、魯迅の場合はそれを強く感じさせない。もはや「四愁詩」の本来の作詩目的である君臣関係の道義心を問うものとはなっていない。反対模倣し、むしろパロディー化することで、併せてそのような伝統や慣習からも訣別している。逆に、訣別すべき対象であったからこそ、パロディーにも利用できていくようにさえ見える。敢えて言えば、後世に付与された解釈にもあったように、「四愁詩」および「擬四愁詩」の形態上の構造がもたらす結果としての階級間の関係が、君臣関係に代わって読み取れるかも知れない。しかし魯迅が階級を意識的に詠んだかは疑問が残る。魯迅自身も言っているように、やはり「失恋詩の諷刺」に主たる目的があったと見れば、主題からいっても「擬四愁詩」の系譜から少しく乖離してくる。「四愁詩」および「擬四愁詩」の流れに沿って詩の基本構造は利用しているものの、あくまで構造上の多面性を利用しているのであり、原詩の忠義からも従来の擬作の忠孝からも乖離していることは間違いない。

いったい魯迅は、原詩をどのように見ていたのか。魯迅自身による「四愁詩」および「擬四愁詩」への言及は、管見の及ぶかぎりでは見出だせないが、扱いは方から言えば、茶化しに利用するものでしかなかったようにも思われる。

「四愁詩」および「擬四愁詩」は、原詩の序で張衡も言っているように、「楚辭」系の文学の精髓を抽出してできている。魯迅は古典のなかでは『楚辭』と『莊子』に殊のほか惹かれていたことが知られており、それに関する発言が

数多く残っている。それらから『楚辭』系の文学への思いを推測してみると、だいぶ後のことになるが、魯迅は『楚辭』離騷に関して、

屈原は『楚辭』の開山老祖、而他的『離騷』却只是不得帮忙的『不平』……
屈原……在文學史上還是重要的作家。爲什麼呢。——就因爲他究竟有文彩。
(屈原は『楚辭』の開祖であるが、その『離騷』は意外にも、主人の手伝いができない不平にすぎない。……屈原は……文学史上やはり重要な作家である。なぜか。——彼には結局文彩が有るからである。「且介亭雜文 二集」從帮忙到撻淡 一九三五年六月六日)

と言っている。ここからは、『楚辭』系の文学を「文彩」はあるが、結局「主人の手伝いができない不平にすぎない」文学と見做していたことが分かる。そしてこの見方こそ、同じく『楚辭』系の文学である「擬四愁詩」にも当てはまるのではないか。家族を案じた馮惟健の詠でさえも、其四は確かに都にいる皇帝の「手伝い」を申し出ている。

魯迅が、原詩および伝統的な「擬四愁詩」を「主人の手伝いができない不平にすぎない」文学と見ていたならば、その利用の背景には伝統的慣習的な内容への茶化しが先行してくるはずである。「我的失恋」詩に原詩に対する共鳴や愛着が感じられないのは、そのためではないか。

『楚辭』離騷を「主人の手伝いができない不平にすぎない」文学と見る根底には、さらに旧態依然とした古典指向から脱却しようともが魯迅自身の潜在的な苦悩が関与している。魯迅の文学には、新旧の対峙を通して新しさを見ようとする面があり、擬古という行為はその象徴とも言える。「我的失恋」詩を収める『野草』を出した当時、魯迅の古典に対する意識および扱いは、きわめて無愛想であったように見える。それは、伝統的慣習的な「四愁詩」および「擬四愁詩」の説く忠孝という内容は、旧社会のものであり、魯迅にとってはもはや価値が見出せない。利用できるものといえば、作品構造(形式ではない)だけであろう。『楚辭』離騷で言えば、「文彩」のみ利用できる。したがって基本構造のみ(しかも変更して)借用するという、それ相応の扱いしにくいことになる。擬作当時の魯迅にも、すでに古典を軽視するような価値観が生まれていたのではないか。一九二〇年代に魯迅が古典詩のパロディーを盛んに作っているのはその現れであるとも考えられる(注11)。茶化しの根底には、そのような意識が横たわっていたのではないか。

そしてその茶化しの対象でしかない君臣関係すなわち「主人の手伝いができ

「擬四愁詩」としての、魯迅の「我的失恋」詩

ない不平」を、恋愛(失恋)における男女の関係に戻して用いたところに、魯迅の「擬四愁詩」への意識が最も現われている。今仮りに「主人の手伝い」を「愛する相手の手伝い」と読み替えた場合、「愛する相手の手伝いができない不平」を詠むのが「我的失恋」詩の其一(其三であり、その絶望的な「不平」を承けて「愛する相手の手伝いができない不平はもう鳴らさない(勝手にしろ)」と結論づけるのが其四となる)。

当時の失恋詩において「ああ、死にたい」が流行した理由について、査子安氏は、

一九二四年前後は、ちょうど「五四」の退潮期で、一部の青年たちは彷徨と苦悶の中に陥っていた。自己の感情世界の中に閉じこもり、詩においては自らの愛情の挫折と不幸を訴え、失恋の苦痛を嘯みしめていたので、失恋詩が盛んになり、一種の風潮にまでなっていて、作中には無病の呻吟も少なくなかった。それは「五四」後の愛情詩発展における一種の変形であり、一種の病的現象であって、それらの失恋詩は精神上の特質と審美上の風格において「五四」の新詩からは随分と遠ざかり、もはやあの「五四」の時期の愛情詩における強烈な個性的精神と自我意識とを侵蝕しつつし、感情表現の方式と審美上の趣向においては伝統的な旧文人の詩作に再び近づいてしまっている。(周振甫主編『魯迅詩作鑑賞』より抄訳)

と言っている。当時の青年たちが失恋を多く詠んだのは、そのような失恋が個々に実際に横行したというよりも、「五四」運動への失望感の反映であるとする。そして、魯迅はそのような失恋詩を批判したのであり、前掲の倪墨炎らの言う階級社会を諷刺するというような解釈を牽強附会であるとす。中には実際の失恋経験を詠んだものもあるかも知れないが、さしずめ「運動の手伝いができない不平」の現われであったと読み換えてもいかも知れない。しかし、むしろ魯迅は、のように失望感に苛まれ退潮するだけの失恋詩に対し、「我的失恋」詩の其四で、最終的に「勝手にしろ」と訣別を告げている。「愛する相手の手伝いができない不平」を詠むだけの当時の絶望的な失恋詩の詩精神に対し、さらに無愛想になる手法を採ることで、「主人の手伝いができない不平」を詠む文学と同等の、もしくはそれ以下の文学として評価を下すという意味をも込めて、「我的失恋」詩は詠まれているのではないか。その点にも魯迅が「擬四愁詩」の系譜に入った意図が窺える。

五

また、魯迅の「我的失恋」詩は原詩に対して「体が小さい」とか、「真の四愁に非ず」という原詩批判の観点からは出発していない。詩題の「我的」は、原詩の「張衡の」や「擬四愁詩」の「傅玄の」失恋に対して「我が失恋」を対峙させようとしたものでもない。当時の失恋詩人の失恋観および詩表現に対し、魯迅自身の失恋を詠んでいる。その点からも、逆に魯迅の観点には原詩や従来への擬作に対する愛着は無かったという批評意識が窺える。しかし一方で、擬作詩は表現手段として模倣形態を採る以上、原詩を無視できない。原詩を支持するか、それに反対するかは選択がまず迫られる。「我的失恋」詩に原詩に対する愛着が感じられないのは、旧詩である原詩を否定しようとする意識が魯迅にはありながら、却って原詩に付き纏われてしまう意識をも反映するからではないか。魯迅は教員として古典詩を読まざるを得ない自分に対し、当時、

……自己却正苦于背了這些古老的鬼魂、擺脫不開、時常感到一種使人悶的沈重。(……自分ではこれら古人の亡霊を背負って脱却できぬことが苦しくて、常に悶々として、いつも息づまるような重苦しさを感じているのです。 「写在『墳』後面」一九二六年十一月十一日)

と言っている。その、「古人の亡霊を背負って脱却できぬこと」が、古典との当面の折り合いをつけようとし、いっそ「擬古」という形で象徴的に現われているのではないかと考えられるのである。

伝統的な古典であるからといって必ずしも共感し信奉する必要はないが、何かを表現しようとする時になると、どうしてもその古典が付き纏って離れない。その苦悩を、せめて「主人の手伝いができない不平にすぎない」ところの「亡霊」を茶化し、逆手にとって利用することで、いわばお茶を濁している。伝統的慣習的な古典(忠孝)から訣別しようとして出来かねている自らの意識(苦悶)を併せて効果的に利用しつつ、絶望的失恋詩という同時代の文学を批評する二重の文脈を持ったものが、魯迅の「擬四愁詩」としての「我的失恋」詩であり、「四愁詩」および「擬四愁詩」の系譜は、そのための最適の表現手段として利用されていると考えたい。

〔注〕

- 1 一九二四年十月三日作、白話体の旧詩として散文詩集『野草』に所収。
竹内好に邦訳がある。

2 倪墨炎『魯迅舊詩淺說』一九七七年上海人民出版社、吳奔星『魯迅詩話』

一九八一年天津人民出版社、張紫晨『魯迅詩解』一九八二年中国社会科学院出版社、周振甫主編『魯迅詩作鑑賞』一九九四年河北人民出版社など。

3 徐雉「失恋」(一九二三年、蘇州東吳大学)による。

4 『文選』所収。

5 モデルとなる原詩を下部テキストとし、変形された擬作詩を上部テキストとすれば、上部と下部の比較を行なうことで、優位が判定できる構造。

6 反対模倣とは、例えば「悠然として南山を見る」に対し、「愕然として南山を見る」の類をいうものとする。

7 「論周氏兄弟的新詩」は一九六二年に東京の中央大学で行なった講演に基づいて著した論文で、『詩論與詩紀』(一九七八年、中華書局)に所収。

8 『詩經』東山に「町疇鹿場、燿燿宵行」とあり、朱熹の詩集傳に「町疇は舍旁の隙地なり。人無し、故に鹿以つて場と爲すなり」という。

9 魯迅に諷刺やパロディのための擬作詩があることは、すでに高田淳『魯迅詩話』(一九七一年、中公新書)などが触れている。

10 以下、「投我以木桃、報之以瓊瑤。匪報也、永以為好也」(第三章)、「投我以木李、報之以瓊玖。匪報也、永以為好也」(第四章)と続く。「四愁詩」のさらなる原型とも言える『詩經』のこの一篇こそ、後の模倣を生む二つの重要な要素を含んでいる。一つは形態上の要素で、『詩經』全篇に見られるように、自己模倣を繰り返す三篇から成り、おそらくは古代の共同体の共通概念伝播の方式を反映する原初的構造を持ち得ている点である。すなわち「投我以木□、報之以瓊□。匪報也、永以為好也」という基本形態を備え、「□」部分の贈答言詞を入れ替えるだけで観念が伝播してゆくように仕組まれている。二つ目は内容上の要素で、ここで詠まれた男女のあり得べき姿は、観念上共同体に有益なものとされる。朱子の『詩集傳』によれば、贈答品間には果実という「微物」と宝玉という「重寶」との差があると言う。当時の価値観が果たしてそうであったかどうかは暫らく措くとしても、物品そのものよりも贈る者の気持ちすなわち「好しみ」を通じた思いにこそ価値があるとされるならば、それはやがて信義を重んずる君臣間のあり得べき姿に置換され、人心に受け入れられてゆく。模倣を生むこれら二つの要素がさらに『楚辭』と合併し、屈原の豊かな文彩と誹謗中傷という妨害に対する悲観とが合わさって後の「四愁詩」に承け継がれ、「失恋詩」が形づくられていったものと考えられる。「擬四愁詩」が文学史上で価値を認められて伝統化し、擬作を多く生んでゆく主な理由の一つは

そこに在ると考える。

11 この時期、曹植「七步詩」、「古詩十九首」迢迢牽牛星詩、崔顥「黃鶴樓」詩などの古典詩を魯迅がパロディーの具として利用していたことも、高田淳『魯迅詩話』に「剽窃」という形で触れられている。

氏は例えば、崔顥の「黃鶴樓」詩の剽窃として、

昔人已に黃鶴に乗って去り

潤人（お金持）已に文化に騎って去り

此の地空しく余す黃鶴樓

此の地空しく余す文化城

黃鶴一たび去って復た返らず

文化一たび去って復た返らず

白雲千載空しく悠々

古城千載冷たく清々

晴川歴々たり漢陽の樹

専車（専用列車）隊々（つらなる）たり前門站

芳草萋々（茂るさま）たり鸚鵡州

晦気（不運）重々たり大学生

日暮れて郷関何処か是れなる

日薄りて楡関（山海関）何処か抗する

烟波江上人をして愁え使む

烟花場上（花柳の巷）人の驚く没し

を比較対照して挙げる。